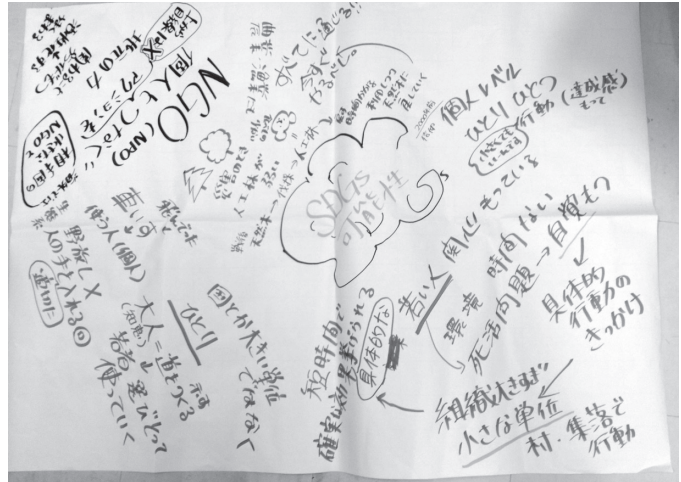


2019
12月

ゆうひろば

遊通信
第 173 号



SDGs・CSO ミーティング「持続可能な開発と市民社会」
(2019年10月22日、札幌エルプラザ)
グループワークの記録より

特集 SDGs と私たち

SDGs のSD って、なに？	・・・ 2
国際開発の経緯とSDGs—NGO の視点から	・・・ 4
一人ひとりが幸せで満足できる社会に向けて	・・・ 7
様々な主体から見たSDGs	・・・ 8
SDGs への市民社会からのアプローチ	・・・ 11
「KANSAI-SDGs 市民アジェンダ」の取り組み	・・・ 12
人びとのSDGs	・・・ 13
報告 抑止力神話を乗り越え、基地撤去への一步を	・・・ 14
報告 「We love OKINAWA	
一デー知事トークキャラバン in 札幌」報告	・・・ 15
寄稿 追悼—東龍夫さん「ヒガくんとユカちゃん」	・・・ 16
連載 フィールドワークな日々 (第80回)	・・・ 17
連載 きまみに俳句 (第22回)	・・・ 18
事務局便り ほか	・・・ 19

人間の基本的ニーズ



うことは、聞き手によって何通りにも解釈できます。誰一人取り残さないで進もうとする、面倒くさくても最初は「あなたにとっては何？」と聞いて、共に理解を作っていくか、と離れて行ってしまいます。

こういう話をしていくにはお互いに信頼し合うことが必要です。信頼を損なうのは「健康でいる」「能力を発揮する」「人に影響を与えられる」「差別がない」「意味を大切にすること」のうち5つの関係性が妨げられる時。こういう状況が自分の周りにあったら、「中立」を盾に黙ったまま現状維持に担担せず、できるだけそれをやめていきたいです。

私たちが住む地球では「太陽と植物」、「長

特集

SDGsと私たち

Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)

一通常、その頭文字をとってSDGs (エスディー・ジーズ) と呼ばれる国連が定めた2030年までの世界共通目標です。その内容はよく知らなくても、どこかで耳にしたことがある、あるいはカラフルなロゴを見たことがあるという人は多いかと思います。しかし、肝心なのはその内容であり、それが私たち一人ひとりの意識や行動とどのように結びつくかということ。今号の特集では、人びと (people) の視点から、SDGsの可能性や課題を考えてみたいと思います。

SDGsSDGって、なに？

牧原ゆりえ

これまで何十年もの間、人々が自然環境や社会を良くしようと試みてきたにも拘らず、解決しない問題は依然残っています。それを解決しようというのだから簡単ではありません。知恵を集めるために皆で一緒に考え、話を聴きあう時間が大切です。それぞれ異なる私たちが、今日みたいに無理やり時間をこじ開けてここに集まったこと、共に対話と協働のための共通言語を学んだことをぜひ覚えておいてください。ここから、お互いにサポートしあえる有機的な関係が生まれることを願って話します。

まずSDGsのSD (持続可能な開発) の定義ですが、1987年のブルントラント報告書での「持続可能な発展/開発とは、将来世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今の世代のニーズを満たすような発展」から始めたいと思います。「ニーズを満たす」を考える枠組みとしては、ヒューマン・スケール・デベロップメント(邦題「ていねいな発展」)を紹介します。この共通言語を使うことで、もっと具体的に一人ひとりのニーズを話せるようになります。

チリの経済学者のマックス・ネーフは「てい

ねいな発展」で経済学と幸福・倫理的なことを結び付けようと思いました。発展や開発はモノが売れたとか経済の指標が上がったとかではなく、Quality of Lifeが大きく改善した時にその社会は発展したと考えようとしたんです。一人ひとり多様なQuality of Lifeを左右するのは基本的ニーズを満たすために持っている人々の可能性だと考えました。そして私たちのニーズを満たすことと、将来の人がニーズを満たすことが、トレードオフにならないように、ニーズのことを考えましようと呼びかけたのです。

ニーズは無限にあるけど、人間の基本的なニーズは生存、保護、愛情、理解、参加、怠惰、創造、アイデンティティ、自由の9つのみとしました。「ニーズ」を満たすのはモノではなくて、満たすための「やり方」です。同じニーズでも満たし方は人それぞれです。これを整理する枠組を使って満たし方を対話することで、当初矛盾すると思われるけれども両方ともかなう満たし方を見つけることができるようになります。

この枠組みを使ったとしても、ある人の言

い年月の地殻とのやり取り」のサイクルを損なわない限り、住み放題、食べ放題。でもこのサイクルを物理的に劣化させたり、金属や鉱物、もしくは科学的に汚染したりすると、このサイクルの力を弱めてしまいます。そうならないようにすることが、持続可能になることなのです。

このようにSDを続けていくために、沢山のRe (Reuse, Recycle, Reduce など) が言われていますが、最も必要なのは「Re-think」。大きく向こう岸のSDに跳躍する、変化の旅に出るために、ただ目の前のことを潰すのではなく、広い視野を持ち、オープンに考え、話し合う、決める、組織を動かす、ためにわたしたち一人ひとりが力をつけていくことが重要。そのためには、今回少し違ったような話合いの練習を続けて、協力を得る力を付けていきたいと思います。

これらの問題が本当なのかどうかを議論している時間はもう無い。だから、これらをやめていくために皆で話し合う時間に使っていきたくて思っています。それが、問題の根本原因を止めることを考えようということ。自分たちが考える力と動ける力をつけること。SDGsは、一人ひとりが選択し、考え、行きための指針です。こっちの方向に行こうという灯台のイメージです。

SDGsをビジネスに利用しているようになり、ちよつと胡散臭いなと思っていましたが、SDGsという手段を使って、地域や暮らしを皆で考えるために集まって話そう、学ぼうという人たちに沢山出会えるようになってからは、とても強力なツールだと思うようになりました。

SDGs関連のビジネスが伸びているのも、経済のルールがSDに向けて変わってきているということなんです。

SDの変化はとても大きくて、農業革命、産業革命、情報革命と過去の大きな変革を超えるものになるでしょう。SDGsは通過点で2030年までの11年間はそれに向けた大きな挑戦への第一歩なので無駄にははいけません。SDはゴールではなくて、終わりのない旅、プロセスであり、100年後も200年後もSDの考え方は無くなることはないのです。

これからもういっぱい話を呼びかけていくのでどこかでまたお会いすると思いますので、よろしくおねがいします。

牧原ゆりえ (まきはらゆりえ)
一般社団法人サステナビリティ・ダイアログ
代表理事。Art of Hosting Japanの世話人。

※2019年9月8日、「SDGsそもそも論」における講演より抄録(編集・横田恒一)

特集

国際開発の経緯とSDGs—NGOの視点から

大橋正明

戦後に始まった「開発」

国際的に認知された「開発」という言葉は第二次世界大戦の前はありませんでした。戦後、米トルーマン大統領による「低開発の国々に援助する」という、ポイントフォーという有名な演説があつて、それ以降、世界の国々はトップに先進国があり、中進国、低開発国があつてと開発の水準によって輪切りされるようになっていきます。

戦前はイギリスが中心にいて世界を植民地として支配していました。それが戦後、一応建前としての一族一国家という民族自決主義があり、新しい国が次々と独立していった。世界の中心がアメリカになって、アメリカが自分の支持者を集めるために援助交際させてくれない？と開発援助をする。ソビエトも同じことやるわけです。当時の開発援助は、自分たちの体制側に取り込むための援助交際と私は基本的に理解しています。60年代は、ケネディが国連で「援助は国連で協調してやるよ」と言っただけです。第一次国連開発の10年が始まって、それがずっと三次、四次と続いていきます。当時は、援助がきて技術も教えてもらい、輸出も伸びて自分たちも工業化して先進国に追いつくという期待をもてた。でも、現実にはうまくいかなかった。開発

というのは容易ではなく、多くの国々では所得の格差が開いたり、汚職が増えたりして、貧しい人たちがますます貧しくなっていく。1970年代—ベーシック・ヒューマン・ニーズの登場と「成長の限界」

開発は簡単にいかない、工業化を目指してもうまくいかない、ということ。70年代にベーシック・ヒューマン・ニーズ(BHN)という路線が出てくる。人間にとつて最低限必要な衣食住や教育などのサービスも含めて提供していかないと、貧しい人たちが社会主義に傾いてしまうということ。BHNを国際機関が盛んに言うようになり。ところで、70年代にはオイルショックが二度ありました。石油の値段が何倍にもなり、独立したばかりの途上国は非常に苦しむ。また、日本などでは水俣病に代表される公害の問題が出てくる。国際開発の方向は、こうしたいろんなことがあつて、国際分業的な輸出志向の工業化に少しずつ変わっていきます。

そして、これが持続可能な開発を求めることにつながるのですが、「成長の限界」が70年代の後半になって本格的に言われだします。「成長の



↑講演後のワークショップ(札幌エルプラザにて)

全般的には格差が広がっていった。その理由のひとつは、それまでの開発援助は戦略援助なのです。社会主義勢力を抑えるために使われるのがODAです。例えばフィリピンのマルコス大統領は共産主義に反対するために、どんなに腐敗にまみれていても日本のODAは支援を続けるわけです。

ところが、90年になってソビエトが崩壊し、人間を中心にした開発が謳われるようになっていく。1990年には国連開発計画(UNDP)が、人間開発指数という考え方を打ち出します。教育とか保健とか所得とかを合わせた指数をつくって、開発概念を大きく変えた。だから、90年代の10年間は開発がいい方向に向かうという期待感に満ちていました。

そうした中、地球環境サミットをはじめとする大規模な国連会議が立て続けに開かれています。そして、これらの国連会議の成果を集約したミレニアム開発宣言というのが2000年に国連総会で採択され、ミレニアム開発目標(MDGs)に辿りつきます。

限界」は、ローマクラブというお金持ちの人たちが大学の先生に書いてもらったレポートです。「人口増加や工業発展がこのまま進むと地球上の天然資源が枯渇して環境汚染が自然の持つ容量を超えて進行する」、今まさにこの状態ですよ。

この本の出た1972年にストックホルムで人間環境会議が開かれて、人間環境宣言が出されました。だけど、国連全体でみると途上国のほうが圧倒的に多かったので、飢えこそが問題であつて、公害は先進国の贅沢病ではないかという意見もありました。

1980〜90年代—累積債務問題

80年代、90年代には累積債務問題が浮上します。途上国が市中銀行やIMF・世界銀行という国際金融機関からお金を借りて、自国の経済を発展させようとするのだが、いろんな理由から借金の返済が難しくなりました。民間会社がお金が返せなくなったら破産しますが、政府はつぶせない。それで代わりにIMFや世界銀行が入って構造調整政策を導入する。経済の構造を調整して輸出してドルを稼げる経済にして、そして借金を確実に返すというのが構造調整政策の根本的な理論です。

具体的には、政府による食糧援助や教育費の補助とかをやめたり、公務員の数を減らしたり、公共交通への補助金を無くす。結果、貧しい人がもっと貧しくなります。金持ちが借りて投資

MDGs(ミレニアム開発目標)の成果と課題

MDGsの良かった点は、累積債務に対する構造調整政策が方針転換されたこと。また、国連政府、NGOで共通の目標ができたことで、資源を集中して投下することができた。それから、援助の量とともに質ということが決められた—これはSDGsには欠けている点です。

一方、MDGsがうまくできなかったのは、アフリカと女性関連のこと。さらに問題なのは、MDGsを決めたのが先進国と国連官僚の一部の人だったということ。これがSDGsでは大きな反省点になっている。

それからNGOから見ると大きな欠点だったのは、格差の問題をゴールや指標に入れていなかったこと。だから中国の経済成長のおかげで貧しい人の数は減ったけど、格差はガーンと開いた。また、貧困削減の具体策に乏しい。それから、新興国の台頭やリーマンショック以降、先進国の開発援助のお金が順当に流れなくなってしまったこと、気候変動や環境の問題、平和やガバナンス、人権という目標が非常に少なかったことです。

SDGsの策定

そして、2016年以降の新たな開発目標として、SDGsが2012年のリオ+20で打ち出されました。途上国側からのMDGsの二の舞はやめよう、先進国を含めて地球を救うものをつくらうという提案が受け入れられた。リオ+20には

をしたけれどもうまくいかなかった。貧乏人が苦しむ形になるとというのが、累積債務の根本的な問題です。結局、開発の成果が台無しになってしまった。

このときに市民運動が大きな活躍をしました。1990年にアフリカのキリスト教協議会が呼びかけて「ジュビリー2000」というキャンペーンが始まった。ジュビリーというのは50年に一度「負債で奴隷化された人々を解放し、負債で奪われた土地を返し、不平等で分裂した共同体を回復した」こと。それを2000年にやるんじゃないか、負債を免除しよう。それが国際的なNGOのキャンペーンになり、日本でも実行委員会ができた。そして、99年のケルンや2000年の沖縄のサミットで話され、少しずつ減らすということになり、一応成功したキャンペーンと言われています。

冷戦の終結と人間開発、社会開発への注目

同時に1990年というのは象徴的な年で、東西対立が終わって歴史の転換点を迎えるわけです。90年代というのは、累積債務問題などで開発の成果が吹き飛んでしまつた状態になっていて、

面白いことにドイツを除いて先進国の首脳が誰も行かなかった。新興国と途上国の人たちが中心

になって、またオープンワーキンググループという誰でも参加できるプロセスをやったのです。それはMDGsの時に一部の人たちだけでつくった

という不満があったから。これが報告書になり、2015年に2030年までの目標が決まった。

サステナブル・ディベロプメント(持続可能な開発)とは何かというと、「将来世代のニーズに応える能力を損ねることなく、現在世代のニーズを満たす発展」。皆さん、空調の効いたいい環境にいますよね。皆さんの子や孫の世代にもこういう環境が維持できるようにしながら、しかも現在社会でこういう状態にいない人たちも同じ状態を楽しめるようにしましょうという考え方です。視点としては、重要な視点を提供している。ただ、下手するとグリーンウォッシュという言葉があるようにSDGsウォッシュも始まっているように、僕はちょっと警戒をしています。

SDGsは貧困をなくすということだし、権利の問題も前に出てきたし、すべての人に適用される。MDGsが先進国に追いつけなかったとしたら、SDGsはトランスフォーム、形を変えるといっているの、よりディカルな変革を求めている。でも、これは選挙の時の公約と同じで、守らなくても誰も罰則を受けることはないのです。だからこそ、皆さんが、NGOが、市民社会がこのことを理解して声をあげていかなければならない。

SDGsの注意点

SDGsで一番の問題なのは、なぜこの地球が持続不可能になったのという原因を書いていないこと。病院に行ったら、診察して、原因はこれだとなつて始めて治療方針が確立するわけです。だけど、なぜこの地球が持続不可能になったのかの原因が分からないまま、治療薬だけ出ている。それが根本的な問題です。

しかも、いろんな人がいろんなこと言ったから、互いに矛盾する意見もあって、それらが美しく並んでいる。だから、産業界も何もかもみんな大賛成なのです。

もうひとつ抜け穴になるのは、SDGs実施指針を各国がつくるのですが、全部を守らなくてもいいとある。日本政府はこれはやるけどこれはやらないと言っても誰も文句は言えない。だから、日本の実施指針を見ると「これでいいのよ」と思うところが出てくる。まもなくこの実施指針の見直しがあります。実施指針には8つの優先課題があるのだけど、MDGsもSDGsもゴールの一番目は貧困なのに、貧困が入ってないのです。また、政府が毎年つくるアクションプランの本柱の一つは、ソサイエティ5.0。これは経団連が言い出したもの。ソサイエティ1.0が狩猟、2.0が農耕、3.0が工業化、4.0が情報化、それで5.0が新たな社会と。だけど例えば、農耕が進んだがため

特集

一人ひとりが幸せで満足できる社会に向けて

大崎美佳

社会は個人と個人の集まり。個人が幸せにならなければ社会は幸せにならない。私が尊敬する方が教えてくれた言葉だ。その方は続ける、「ホストユアセルフ。自分の幸せのために休んだり、人と会ったり、愛情を感じたりすることが大事。幸せのために何をしたいの自分と対話をしよう。」最初にこのお話を聞いた時、目から鱗だった。「世のため、人のため」とか「社会の役に立とう」というお話はよく聞いていたが、自分に目を向けることに驚いた。自分が満たされていないと他のことに目は向かない。ホストユアセルフを知ってから、だらしのない自分でも許せるようになった。「自分の思っていること、嫌なことを発言しよう」と思った。

一人ひとりが幸せで満足できる社会を作っていく。これに反対する人はいないけれど、実現はできていない。皆さん自身は幸せ? 国連が国際幸福デー3月20日に合わせて発表する「世界幸福度ランキング」。2019年、日本は153カ国中54位。このランキングは、どのくらい幸せと感じているかについて、GDP、平均余命、寛大さ、社会的支援、自由

度等を指標にして作られている。幸せというのは主観的であるが、指標の選び方は自身のことを考えるときに参考になりそうです。指標にあった社会的な支援に注目したい。「ジェンダー平等」は数年前に比べて耳にするようになった。社会全体でジェンダー平等を目指すそうと女性の社会進出とか、女性が働きやすい職場づくり等という標語が出てきた。しかし、「女性の賃金は男性に比べて低い、女性というだけでアルバイトと同様の仕事を持たされる」という現状があると聞いた。同時にこの現状を打破しようとする人にも出会った。会社の仕組みを変えようとする方(誰でも仕事内容の選択肢があるようにする)、相談窓口を設けた方、セミナー等で問題を提議したり社会に訴える方だ。ジェンダー平等に向けて、当事者が抱える悩みや課題を明確にし、それを解決しようとアクションをしていこうと語る姿から大きなエネルギーを感じた。やはり大切なことは本当に悩んでいる方の話を聞くことである。

大崎美佳(おおさき みか) 自然の中にいるのが好き。台湾好き。EPO北海道/北海道地方ESD活動支援センタースタッフ。

北海道平和運動フォーラム 代表 江本 秀春 代表 清末 愛砂 代表 長田 秀樹 札幌市中央区北4条西12丁目 TEL.011-231-4157 FAX.011-261-2759 http://peace-forum.org/

に貧富の格差ができて、工業化ができて地球の汚染という問題が生じた。フェーズが変わるたびに大きな問題が起きているのに、50ですべてが解決するなんて、これはちょっとヤバいって僕は思っています。それから、他の二つの柱は地方創生と女性活躍。これは安倍さんが言っていることと同じ。SDGsがそついう風に利用されてるってことなのです。

最後のスライドの2つの写真、左はロヒンギヤの難民キャンプ、右はパレスチナです。こういう人たちにとって、SDGsはほとんど意味を持っていない。SDGsはいいこともたくさん書かれているのだけれども、いいことだらけでほめ殺しのようなものになってるし、みんなの勝手な解釈も許してる。だから、市民社会的な目、あるいは生活者の目で、一番困っている人たちにとってサステナブルな開発というのはどうありうるのか、ということを出していかないと、好きなようにされてしまつよというのが私の一番の懸念点です。

大橋正明(おおはし まさあき) 聖心女子大学教授、聖心女子大学グローバル共生研究所所長。SDGs市民社会ネットワーク共同代表。

※2019年10月22日、「持続可能な開発と市民社会」NGO・NPOのこれまでとこれから」基調講演より抄録(編集・小泉雅弘)

介したい。国連では、持続可能な開発のために全ての人から意見を受け取ることができるよう、9つのメジャーグループをつくった。9つは、女性、子どもと若者、先住民、NGO、地方自治体、労働者・労働組合、ビジネスと産業、科学技術コミュニティ、農業従事者だ(その他の利害関係者を設定し、対象範囲を広げている)。

このような仕組みを北海道の中でも作っていききたい。例えば行政計画策定の時に各グループから意見を聞く仕組みがあると、誰もが幸せになる社会的支援の拡大につながるのではと考える。NPO法人さつぽろ自由学校「遊」さんと一緒に取り組んでいきたいと思つ。忘れないでほしい。社会は人間だけではなくすべて生命から成り立っている。植物の声、動物の声、海の声、すべての生命体のことを考えながら、私は一人ひとりが幸せで満足できる社会を目指していきたい。

■SDGsをキーワードとしたつながり

多世代が参加するSDGsに関するイベントで「社会問題は山積みだし、これから若い人たちが頼むよー」と言われることがたまにある。悲しくなるし、違うと思う。どんなに頭の良い同世代が集まったってできないことはあるし、違う世代の方からしか教えてもらえないこともある。若い人でくっついて投げらんじゃなくて、いろんな人と一緒にやりたい。

今私は「任意団体omusubi代表」として表向きにユースをつなぎ、その裏では違う世代の人たちをつないでいる。世代のタテヨコを問わない持続可能で良好な人間関係をなるべく広い範囲で実現したいし、それぞれ立場が違うからこそできることに目を向けたいと思う。活動していて感じるのは、SDGsがキーワードだとたくさん信頼できる人に出会える、ということだ。自分も相手も「それぞれができることをやって、社会を良くしていこう」という同じ目的に向かっていることがわかっている安心感がある。私は突出した専門分野を持たないし社会経験にも乏しいので、社会のために何かできるのか未だにピンと来ていないし不安がある。しかしキーワードは利害でも期待でもなくSDGsだから、長期的な貢献を自然と考える事ができる。負い目を感じずに頼ったり挑戦したりができる。

素敵な「まさかこんな未来になるとは思いもしなかったね！」を見るために、未来を真剣に考えるかっこいい大人になるために何が出来るだろう。お世話になっている方の顔を思い浮かべながら今日も考える。

小路楓(しょうじ かえで)

1994年生まれ。香川県出身、愛媛大学卒業。北海道大学大学院環境科学院修士課程に在学中。ユースをつなぐ任意団体omusubi代表。

若者 Youth

■SDGsとジェンダー平等

男女共同参画の仕事に長く関わってきたが、SDGsのインパクトの大きさを感じている。SDGsは「ジェンダー平等はすべての社会課題に横串を刺すクロスカッティング・イシューである」ことを明らかにしてくれた。目標5として「ジェンダー平等の実現」が掲げられているほかに、前文・宣言においてもその重要性が強調されている。さらに、CSOネットワークのHPによると、169のターゲットの34%、230のインディケータの32%をジェンダーに関わる指標が占めていると評価されている。ジェンダー平等を共通言語に、他分野の活動家たちと一緒に行動できるきっかけができたのが、SDGsからの最大のギフトであった。この認識を地域で拡げるために、協働の意味がこめられたhigh touch(ハイタッチ)と目標5をかけて、「Hi・5」のフレーズのもと、様々な分野の方々との協働でジェンダー平等、SDGsを地域で実現しよう」という取り組みを行っている。先月11月には、環境、ICT、LGBTsの活動を行なっているゲストと、それぞれの活動とジェンダーの掛け合わせで生まれる未来について議論した。人的な関係性・ネットワークと、アクションの可能性の両方を拡げていけると確信している。2030年までの10年で、女性及び女兒へのあらゆる形態の差別を撤廃するという約束を守るために、取り組みを通して仲間や必要なリソースを手に入れたい。

菅原亜都子(すがわらあつこ)

学生の頃に「ジェンダー」に出会い、母親や女友達の抱える問題が彼女たち個人の問題ではなく社会的に作られたことを知る。男女共同参画センター職員。

女性 Women

■SDGs企業の取組が重要!

SDGs、まだ企業人や経営者には言葉くらいしか知られていないのではないだろうか?

しかし、企業が事業を行う上で、何かしら社会課題の解決に関わる事業や活動を行っていると思われるが、SDGsのすべての目指すものを知らない場合、良い取り組みの反面、トレードオフが起きていることがあり得る。

過去何度か経営者の前でSDGsやESDについてお話をする機会を頂き、その後、「我が社は〇〇をしているがSDGsの取組と言って良いのでしょうか?」と時々聞かれる。「その行為が確かに社会課題に繋がる行為である場合には堂々と表現をするべき」であるが、必ず付け加えているのが、「17のゴールで取組んでいないもの、取組まなくてはいけない事を明確にすることも重要」とお話しするようにしている。「やっているから我が社はいいのだー」ではなく、「これから何をしなければいけないのか?」が大切だと感じている。

1番の貧困についても、途上国の問題と捉えがちではあるが、私は日本としても重要な課題だと思っている。先進国の中で日本以外は20年間で1.8倍まで所得が上がっているが、日本は20年間で9%下がっている。最低賃金も先進国の中で最も低く、全国平均1000円以下であることも貧困が増えている要因であるだろう。この様な状況を生んでいるのが、労働生産性を上げ賃金を上げる努力を怠った中小企業の大きな責任であると私は考える。

中小企業

Smaller Companies

■先住民族の知恵と持続可能性

1995年に出された「平成7年版環境白書」には、「人類の存続のためには、持続可能な文明を築いてきたアイヌ民族のような先住民族の知恵に学ぶべきだ」ということが一頁を割いて書かれています。「アイヌの人々の間では、海や川から得られる食物は神からの恵みと考え、クマやキツネなども共有すべきものとして、とり尽さず他の生物の取り分を残しておくという狩猟・漁労・採集の習慣があったと言われている」とも書かれています。「この大地は親からもらったものではない。子孫から預かったものだ。だから無傷で未来の子孫に返さないといけない」というアメリカ先住民の言葉もあります。

先住民族

Indigenous Peoples

以下は、小野有五さんの文章より。「地球は「重病人」であるが、さいわい、地球の病気の原因は、はっきりしている。化石燃料の使用過ぎである。：暖房や照明、交通・運輸などに使うエネルギーを少しでも減らすこと。省エネルギーがまず第一である。そして風力やソーラーなど、いくらでも再生できるエネルギーを増やし、石油や危険な核のゴミを残す原発からの脱却を図ること。しかし、二酸化炭素を減らすには、暖房や発電のことだけを考えていけばいいのではない。これ以上、自然や生態系を壊さないこと。自然を壊すために使われている莫大なエネルギーを減らすことが重要である。」「『自然のメッセージを聴く』(2007)

阿部ユボ(あべゆぼ)

北海道アイヌ協会副理事長。札幌アイヌ協会会長。

生活クラブは、
ちょっと変わった
生協です♪
モットーは
「おいしくてカラダによくて
自然を壊さない」です

生活クラブ北海道 検索

農業とSDGs

これまでずっと私は、工業化された農業と経済発展を目的とした食品流通が生み出す問題を見つめ続けてきましたが、その多くの問題の根には共通点があることに気がつきました。それは、人が土から離れてしまったということです。物理的に日常の中で土に触れることがほとんどなくなりました。土の存在を意識することもなく、土を思いやることもなく一日が終わる生活。朝日を浴びながら大地に立つ時に感じる心の平安や、大地に抱かれ根を張る喜びからも遠ざかってしまった現代の私たちの暮らし。

SDGsへの鍵は、私たちの命の源である大地との繋がりを頭だけでなく身体で再確認し、大地が、海が、どうすれば繰り返し新しい命を生み出し続けられるか、そのために人はどうしたらいいのかと、問い続けることだと思っています。

ここで思い返していただきたいのは、日本には2000年以上にも渡る農耕の歴史があるということです。1905年にアメリカから、中国・韓国・日本を訪ね『東亜4000年の農民』という本を



著作したF・H・キングという土壤学者がいました。彼がその本の中で、どうしても解き明かしたかったのは、それらの国々ではどうして土が痩せることなく養分が保たれ、永続的に農業を営み続けることができるのかということでした。彼にとって一番驚きだったのは、農民に限らず国民すべてが、土の健康を維持することの重要性を理解しており、全ての有機物（人の排泄物さえ）を土に還すという行為が、文化の中に根ざしているということでした。それを怠るということはすなわち飢餓へ向かう道だということにみんなが気づいていたということです。

しかし、その2000年を超えて培われた日本の人々の常識に変化が起こります。第二次世界大戦後、農業は根を下ろしていた文化という土壌から引き抜かれ、経済のシステムに組み込まれていきました。文化ではなく経済の中に農業を位置づけた理由とは何だったのでしょうか。それは経済を発展させるため。そして、産業に利益をもたらすためです。その結果、「限られた労働力と資源の中でいかに生産性を上げ競争に打ち勝つか」が目標となり、その答えは絶え間な

農民 Farmers

く開発される新しい科学技術に委ねられていきました。農村が抱える様々な問題や、それによって起こる環境破壊は、私たちの日常を脅かすところまで進んでいます。そのことすら経済発展のチャンスとして、新しい科学技術による工業製品の売り上げに貢献させられているのです。

足の下の大地的つながりを取り戻してください。陽の光や雨が降り注ぎ、草木の根と微生物、虫や動物が息づく大地。私たちは、大地が私たちを生かしてくれていることを五感で感じ、恵みを祝い、分かち合い、あなたと私と、この大地に生きる全てのいのちが、互いを生かしながらつながり合う暮らしをつくっていくことができます。

ここから生まれるひとつひとつの行動が希望となり、津々浦々に広がったとき、既存の政治も社会も必ずや変わると信じています。

〈引用文献〉
F・H・キング著、杉本俊郎訳（2009）『東アジア四千年の永続農業へ中国・韓国・日本』農文協。

エップレイモンド&荒谷明子
メノビレッジ長沼

特集

SDGsへの市民社会からのアプローチ

新田英理子

JICA北海道の野吾さんが、ギター持参でフォークソング調でSDGsの歌を披露してくださいましたのは、「誰ひとり、取り残さない」SDGsと北海道、そして市民社会」をテーマに、SDGsに関するフォーラムを実施した、2017年11月20日。今から2年前のこと。同年9月に国会のある東京の議員会館でフォーラムを実施し、市民社会からのSDGs実践先進地として、北海道と岡山でも市民社会からの提案としてフォーラムを実施した。札幌では4者共催（超党派NPO議員連盟、北海道NPOサポートセンター、NPO法人さつぽろ自由学校「遊」とSDGs市民社会ネットワーク（以下、当団体）という、今からさかのぼって考えてもボトムアップ型のフォーラムが実施できた。

当団体は、市民社会からのSDGsの達成を政策提言、普及啓発活動、連携事業、調査研究を柱として120団体近くの個々の団体の皆さんが会員となっているネットワーク組織。MDGsの達成を目指して活動していた団体のレガシーを活かしながら、リオプラス20への政策提言、障害者権利条約への政策

提言、国内でNPO法への政策提言などを行ってきた団体などが緩やかに連携を行い、SDGsの達成をミッションとしている。

SDGsは、日本社会ではここ1年でぐっと認知度が高まってきた。内容はともかく、特に17色のカラフルなSDGsバッジや目標を表すピクトグラムを見かけない日はないほどだ。当団体では、認知度とは裏腹に達成には程遠いと言われている現状に大変危機感を強めている。熱心にSDGsに取り組んでいると宣伝しているが、実は、アジェンダそのものを読んだことがなかったり、日本政府が閣議決定した実施指針が2016年12月22日（今から3年前）からあって、17目標から、8つの優先課題を抜き出して推進されていることを知らない人や組織が多いのも現状だ。

先ほど申し上げた閣議決定された持続可能な開発目標（SDGs）実施指針の「6. フォローアップ・レビュー」には、以下のように記述されており、実際に、今まさしく



JAPAN CIVIL SOCIETY NETWORK ON SDGs
SDGs 市民社会ネットワーク

ことをご存知ない人や組織が多いのも現状だ。先ほど申し上げた閣議決定された持続可能な開発目標（SDGs）実施指針の「6. フォローアップ・レビュー」には、以下のように記述されており、実際に、今まさしく

日本政府のSDGs実施指針の改定作業が佳境を迎えている。「…最初の取組状況の確認及び見直しは、2019年に開催される次の首脳級のHLPF（ハイレベル政治フォーラム）を見据え、2019年までを目途に実施し…」

当団体では、市民一人一人の知見からの「誰一人取り残さない」というSDGsの理念を基礎として、SDGs推進本部への働きかけ、政党への働きかけを行うと同時に、国際社会や日本の地域のさまざまな団体との連携を試みている。本年度大阪で実施されたG20に対し、2018年アルゼンチンで実施されたG20（20か国の市民社会の連合体）から、日本、そしてサウジアラビアへの引継ぎへの共同事務局も担っている。

「多様な連携を試みながら、このままでは続かないのではないかとされている社会を、2030年までに、誰一人取り残されずにづく地域、日本、そして世界に変革していきたい」と考えています。ぜひ、一緒に活動しましょう。

新田英理子（にったえりこ）

富山県出身。大学卒業後民間企業で3年働いたのち、NPOの世界へ。NPOの基盤強化を目指す日本NPOセンターで職員、事務局長を経験したのち、2019年4月からSDGs市民社会ネットワーク専従に。

特集

「KANSAI・SDGs市民アジェンダ」のとりくみ

高橋美和子

—— 市民社会・地域主導によるSDGsのアドボカシーと実践

NPO法人さっぽろ自由学校「遊」が作成した『SDGs北海道の地域目標をつくらう』をはじめて手にしたのは、2017年の春。その後、関西では、あるNGOの提案をきっかけに、SDGsに積極的に関わろうとする機運がNGO/CSOの中で高まりをみせていました。

2017年以降、人、アイデア、地域、そしていくつかの幸運な機会が結びつき、関西NGO協議会(KNC)はさっぽろ自由学校「遊」事務局長の小泉雅弘さんを招いて

2018年7月7日、「KANSAI・SDGs」(以下、K・SDGs)キックオフ大会を大阪で開催します。北海道の取り組みからは、行政や企業とは異なる市民社会、地域が主体となつてすすめていくアジェンダづくりの姿勢を学び、その意義を再確認しました。手探りの状態であったものの、関西でもこの取り組みを進めるべく、これを機会にKNCは小さな一歩を踏み出すこととなります。

記念すべき第一回目のK・SDG



S分科会(2018年9月)は、「人権・ジェンダー」をテーマに選び、2019年11月末までに「災害」「多文化共生」「教育」「持続可能な働き方・ビジネス・人権」「環境」「食と農」、計7つの分科会を開催しました。各分科会はNGOや教員の有志が座長・副座長となり、2030年のあつてほしい地域・世界の姿を参加者とともに考え、その声を丁寧に集めていくという作業でもあります。その声はすべて記録に取りカテゴライズをしますが、その過程でどの分科会でも共通する「キーワード」が見えてきました。「地域社会」「教育」「仕事と生活」、そして「人権」という概念です。これはSDGsのすべてのゴールの根幹であり、私たちの普段の生活の中でも、もっとも大切な普遍的価値でもあります。

20に続き、G20大阪市民サミット、韓国の世界人権都市フォーラムでもこの取り組みを報告する機会を持ちました。いくつかの分科会とフォーラムやシンポジウムを経て、このK・SDGsの活動は「市民性」「地域性」という特徴がより明確になり、他の地域・国とも課題と成果を共有し、ゆるやかなネットワークをつくることで次の段階に進もうとしています。

政府や企業の主導ではなく、市民一人ひとりがSDGsの実践者であろうとする姿は、誰一人取り残さない社会の実現にむけた、もしかしたら一番の近道なのかもしれません。これまでの歩み、成果については冊子にまとめ、目の不自由な方、外国にルーツのある方も含め、市民・地域アジェンダの取り組みに関心をもっていた方のように、多くの方に手に取っていただけるようにと思っております。完成を楽しみに待っています。

【参考】kansango.net/kansai-sdgs/category/citizen_agenda/

高橋美和子(たかはしみわこ)
大阪大学大学院卒業。(特活) 関西NGO協議会事務局長。

特集

人びととSDGs

小泉雅弘

いまから30年前の1989年、私はピープルズ・プラン21世紀(以下、PP21)という国際民衆行事に参加していた。「アジア・太平洋の人びとと共に、21世紀のオルタナティブなビジョンを描こう!」という呼びかけのもと、全国各地に実行委員会が設けられ、89年の夏に様々な国際会議やイベントを同時多発的に行うという大がかりな事業で、最後に参加者は水俣に集まり「水俣宣言」を採択した。翌1990年に設立したさっぽろ自由学校「遊」は、北海道の地でこのPP21に関わった有志によって立ち上げられたものである。当時、まだ20代後半で生きた方の軸足が定まっていなかった私にとって、今のような世界ビジョンを共同で描こうというPP21の呼びかけは魅力的なもので、実際にこの時の経験はその後の生き方に大きな影響を与えたと思う。

「遊」で私がSDGsに関わる取り組みを進めていく際に、改めて想起されるのはこのPP21の経験である。2030年という少し先の未来の私たちの生きる世界のあるべき姿を描き、そこに向けた目標を設定しているSDGsを含む「持続可能な開発のための2030アジェンダ」には、まっとうな(持続可能で公正な)未来をつくるために世界全体で取り組んでいこうとい

う意思が感じられるし、実際、未来を担う若い世代の間でSDGsへの関心は高い。

もちろん、社会運動に関わる市民が集まって手弁当でつくりあげたPP21やそこで採択された水俣宣言と、基本的には各国政府の代表からなる国連が打ち出したSDGsとは、その性格は異なる。国内だけを見ても、SDGsについては政府や自治体、そして経団連も、それを意識した方針やビジョンを打ち出しており、よく言えば広がりがあるが、反面その受け止め方や解釈はバラバラである。それゆえ、SDGsなんて信用できないという声もチラホラと耳にする。しかし、私はだからこそ、SDGsは私たち一人ひとり、すなわち「人びと」の視点と参画こそが重要な意味を持つと感じている。

PP21は、文字通りピープル(人びと)を主語とした集まりであり、水俣宣言は以下のように結ばれている。「このような行動を通して、人びとは、自分たち自身の21世紀を力を合わせてつくりだす『ピープル』となるのである。」「ここで言う『人びと』とは、のっぺらぼうな画一化された人間の集団のことではなく、一人ひとりが異なる顔を持ち、属性をもつ多様な個人や集団の集まりである。89年にPP21で開催された国際会議とは、先住民、女性たち、農民、労

働者などの会議であった。国内外のそうした多様な「人びと」からの声を重ねあわせ、「希望の連合」を掲げたのが水俣宣言であった。

SDGsを地域で進めていくうえで、私が国連のメジャーグループに注目し、地域においてもそれを構成したいと考えたのもこうした経験が元になっている。国連では、先住民や女性、農民、労働者、若者などが持続可能な開発を進めていく上での主要な集団として位置付けられており、そうした姿勢こそがSDGsを「人びと」のものとする上での鍵となると思うのである。

SDGsを進めていくうえで、マルチセクターの協働が呼びかけられ、官民一体となつて…などよく言われるが、少し違うのではないかと思う。私たちが進めるべきは、マーケットの原理や硬直した官僚システムに依存する行政や大企業、それらに支配されている社会のあり方を、「人びと」の視点と参画によって、自らコントロールできる形に組み立て直すことである。

「我々の世界を変革(transform)する」とタイトルに掲げ、「誰ひとり取り残さない」ことを誓っている2030アジェンダは、以下のようにも述べている。「これは、人々の、人々による人々のためのアジェンダであり、そのことこそが、このアジェンダを成功に導くと信じる。」

小泉雅弘(こいずみまさひろ)

さっぽろ自由学校「遊」事務局長

企画
報告

抑止力神話を乗り越え、基地撤去への一歩を ——「沖縄ウィークin札幌」に参加して

飯島秀明

遊で、一つのテーマで企画を1週間続けたのは初めてではないか、とのこと。札幌での玉城知事トークキャラバンに向け、愛生館サロンで10月23日から11月1日まで行われた「沖縄ウィークin札幌」。沖縄に連帯しよう

んは、沖縄と北海道の比較から始め、マイノリティに「らしさ」を押しつけるのでなく、一人ひとりの人間の多様性を尊重すべきだと訴えた。ウィークの締めくくりとなった堀元さんの話。1952年の日本の主権回復時

「沖縄ウィークin札幌」より 本土の住民運動が、結果的にとはいえ、「日本」から切り捨てられ米軍の支配下に置かれていた沖縄にさらなる犠牲を強い、どう受け止めたらいいのか。



そうして迎えた11月19日のトークキャラバン。約1100人が集まった会場は熱気に満ちていた。しかし私自身は、ステージ上の「We love OKINAWA」という文字

に居心地の悪さを感じていた。私たちが本当に沖縄を愛しているのなら、なぜ玉城知事が全国を回り、沖縄にこれ以上基地をつくらないう訴えなければならぬのだろうか。抑止力として米軍に依存する「力による安全保障」神話に、多くの国民がからめとられている。しかしそれでは、対立と憎悪が増幅し合い、基地と危険な訓練によって沖縄県民の暮らしは危険にさらされ続けるだろう。求められるのは、地球規模で言えば、アフガニスタンでの中村哲さんの実践であり、近隣との関係で言えば、今度こそ真摯に自分の国の戦争責任に向き合い、信頼を再構築するとう、脱抑止力、脱基地の道ではないだろうか。

飯島秀明(いじまひであき) 北海道新聞社勤務。最後の現場となった静内支局では、アイヌの皆さんへの取材に加え、日高線問題、台風被害などに追われました。定年を迎え、今夏から関連会社に出向しています。「遊」会員。

企画
報告

「We love OKINAWA——デニー知事トークキャラバンin札幌」報告

堀元進

今、沖縄県民の願いを無視し、亜熱帯の地球規模的希少生物の住む美しい海を破壊しながら辺野古新基地建設を強行しているのは、民主主義制度である国政選挙を通じて選ばれた日本政府である。国家の意思を許しているのは選挙権を持つ国民。「沖縄」の状況は日本全体が作り出している。今年6月の東京から始まる沖縄県主催の「デニー知事トークキャラバン」は名古屋、大阪に次いで11月19日の札幌が4カ所目。テーマは「沖縄の声を聞き、皆で考えてみませんか?」。会場は教育文化会館大ホール。準備期間が一月程しかない中、ボランティアが集まった多くの関係者の献身的努力により、周知が進み、事前予約は締め切りを超え、当日は定員1100人の全席が埋まる盛況であった。

冒頭の県担当職員による新基地建設の経緯と現状報告に続いて知事が登壇。沖縄の戦後史にデニー知事の生い立ちを軽妙に織り交ぜながら県民生活に及ぼす基地の影響や地位協定の国際比較、面積では沖縄県にほぼ匹敵する札幌市に置き換えての過重な基地負担の解説。併せて貧困の問題に象徴される生活レベ

ルの市民的課題を提示し、全てに共通する解決の鍵は、「他人事」として無関心に逃げ込まない事、と聴衆に語りかけた。人間としての思いやり(肝心IIちむぐくる)や違いを認め合う多様性の持つ真の豊かさ。そして物事を「自分事」として考える大切さ。玉城知事の暖かで優しい言葉が南の風に乗って届いた基調講演であった。

最後のセッションは、地元で活躍する比較的若手の方がパネラーとして登壇。新聞記者の長谷川綾さん、出版社勤務の下郷紗季さん、保育士の保坂勇祐さんの三名。沖縄への関わり、それぞれの立場で日々感ずる社会的な課題や現在の政治状況への危惧等を発言し討論。司会進行はキャラバンの事務局を担っている「新外交イニシアティブ」代表の猿田沙世さん(弁護士)。途中から知事もその輪



会場外に置かれた募金箱の前で。堀元さん(左から2人目)、デニー知事(右端)。

に加わり、会の終了まで中座する参加者は僅か。沖縄の現状を理解し問題を全国で解決する動きを作り出す、という初期の目的は十分に達せられたと考えられる。

会場の外には県人会である北海道・沖縄クラブが作成した首里城正殿を模した大型募金箱が設置され、10月末の首里城火災に心を痛め、その復興、再建を願う人達から沢山の募金を頂いた。総額は86万2425円。街に雪化粧が始まった北国と南国沖縄の未来への希求が一つになった思い出に残るキャラバンであった。

堀元進(ほりもとすすむ) 1956年札幌市生まれ。琉球大学卒、医師。沖縄通い、居住歴は合わせて45年。北海道・沖縄クラブ会長。妻は那覇生まれのウチナンチュ。

寄稿

追悼—東龍夫さん

ヒガくんとユカちゃん

花崎 皋平

ヒガくんが亡くなった

まだ六十七歳 早すぎた

だけど君はいい人生を送ったね

君の書いた本『ザ・ソウル・オブ・くず屋』を読みました
ステキな本です

この書名はユカちゃんの着想だったね

さもありません さすがユカ

あなた方二人の出会いが 札幌のウーマンリブ運動といつていい

若いころのユカちゃんはやんちゃでした

ヒガくんは その疾走する若牛のようなユカを愛して共に生きまし

た

ヒガくんは 有限会社ひがしりサイクルサービスを立ち上げ

札幌市資源リサイクル事業協同組合の理事長になっただけではなく

ブラジルのリオデジャネイロで開かれた地球サミットに

市民連絡会のメンバーとして参加

その十年後 南アフリカヨハネスブルグでの

国連持続可能な開発会議にも参加

大げさに言つと「世界に羽ばたく」くず屋でした

自分の会社では 障害を持った人たちを積極的に雇用して

共に働き 原発反対で 福島の人ともつながりました

一九八〇年代だったでしょうか

廃品回収の仕事をしなから 原発のキャンパにと

毎月 友だちの家の古新聞回収

私も助手席に乗せてもらって手伝いました

ヒガくんは リブの仲間の自主出産の取り上げ役もやりました

ユカちゃんは 仲間と共同保育館「猿(ばく)」を立ち上げ

ガキンチョごちゃごちゃの 子育て

そこで育つた子はみんな 個性豊かな生き方をしています

やがて環境を守るグッズを売る店『これからや』を経営

東チモールのコーヒー生産者を訪ねて交流したり

持ち前の明るさで 生存中心の

サブスタンスの生き方を 身をもって実践しています

ユカを 私の娘にノミネートしたので

ヒガも さしずめ息子にノミネートしなくちゃ

そのヒガくんが癌で逝ってしまった

早すぎるけれど きつと納得していただろう

思い切り生きたと

2019年11月14日、本誌の長期連載「ひがしさん
のボロボロ日記」の執筆者であり、「遊」の設立以
来のメンバーであった東龍夫さんが亡くなりました。
ご冥福をお祈りいたします。(編集チーム)



第八〇回 あるカトリック・ファミリーの
移住史(1)

イワシから世界を見てみよう、とイワシを追い
かけていたら、長崎のカトリック・コミュニティに
出会った。

たとえば、イワシ漁や煮干し加工のメッカの一つ
である長崎県佐保市神崎(こうざき)
集落はほとんどの住民がカトリック信
者だし、かつてイワシ産業のメッカだっ
た五島列島・中通島(なかどおりしま)
も、イワシ漁にたずさわる漁師の多く
がカトリック信者だった(鎌田慧「ま
き網盛衰史・長崎県奈良尾町」に、そ
の様子が描かれている)。

ごく大雑把に言うところのことだ。
隠れキリシタン(潜伏キリシタン)、そ
してカトリック信者は、長い歴史の中
で周辺部に置かれ、古くは迫害を恐れ、
また、生活の安定を求めて、移住を繰
り返してきた。新しい土地では、土地
をもつのが難しいので、労働者として
働くか、海に出るしかない。そこでイ
ワシ漁だ。イワシ漁は、明治以降、長
崎各地で現金収入の重要な手段になっ
ていた。

イワシ漁にたずさわる、たずさわら
ないは別として、長崎のカトリック・コ
ミュニティは移住を繰り返してきた。叶



堂隆三著『カトリック信徒の移動とコミュニティの
形成』は、その詳細を明らかにした力作だ。この
本を読んでいる中で、僕は、一九〇〇(明治三三)
年ごろ「滝下精蔵」らが五島から平戸島に移住し
た、という記述を見つけた。「滝下」は僕の妻、実
千代さんの旧姓だ。その父、つまり僕の義父は、
平戸出身の敬虔なカトリック信者で東京在住(若
いころに平戸から東京に単身移住した)。

「滝下精蔵」の話は、かねて「先祖は隠れ
キリシタンで、五島列島から来たらしい」
と言っていた義父の話とピタリと一致す
る。滝下精蔵の移住先とされている平戸
の地区は、義父の出身地そのものだった。
「滝下精蔵」は滝下家の先祖と考えてまず
間違いない。

思わぬ出会い方をしてしまった僕は、
滝下家の歴史を追いかけてみることに
なった。それは、思わぬ広がりを持った
移住の歴史だった。

江戸後期の一七九七(寛政九)年、現
在の長崎市外海(そとめ)地方(遠藤周
作『沈黙』の舞台だ)に領地を持つてい
た大村藩が、潜伏キリシタンたち一〇八
名を五島列島に開拓移住させた。以降
三〇〇人ほどのキリシタンが五島に移
住したと言われる。未開発の土地を開墾
させるために五島藩が大村藩に相談して
決めたものだ。大村藩側からすれば、あ
る種の棄民政策だったようだ。

おそらく、滝下家の先祖もその中にいた。滝下
家が移住したのは五島列島・中通島の鯛ノ浦とい
う地区で、外海地方からの移住者が多い土地と伝
えられている。

明治に入り、しかしまだキリシタン弾圧が続い
ていたころ、その鯛ノ浦でのキリシタンの中心人
物だったとされるのが、先ほどの滝下精蔵だった。
精蔵を初めとする鯛ノ浦のキリシタンたちは、隣
の福江島の役人による弾圧に遭う。「縛ったまま海
へ投げ入れ、足に綱をつけて船の艦(とも)に結
び、五丁櫓を立てて逆漕ぎに漕ぎ廻るやら、散々
な目に遭」った。役人は、とくに「精蔵だけを(中
略)引き出し、再び算木にも乗せれば、逆漕ぎに
も遇(あ)わした。息が切れると引上げて水を吐
かせ、身を暖めたり、薬を飲ませたりして蘇生させ、
蘇生すると再び海に突込んで漕ぎ廻ると云う様に、
随分残酷なことをやった」(『五島キリシタン史』)。

キリスト教が解禁されるのがその後の一八七四
(明治七)年。鯛ノ浦は、島のカトリック教会の中
心地の一つになるが、滝下家はその後再移住し、最
後は北海道に移住する。その話は次回に。(つづく)
(資料:文中に挙げたもののほか、『五島編年
史』、『有川町郷土誌』一九二〇年版、一九七二年版、
一九九三年版、『鯛ノ浦修道院二〇〇年の歩み』、『鯛
ノ浦小教区史』、鎌田慧『日本列島を往く』(海
に生きるひとびと)他)

宮内泰介(みやうちたいすけ)

一九六一年生まれ。さっぽろ自由学校「遊」共
同代表。北海道大学教員(環境社会学)。ソロモ
ン諸島、北海道、宮城などへ、環境、生活の調査中。



そのままに俳句

第22回

世界最短の定型詩と言われる俳句。五・七・五で作られる世界。日常、見たり聞いたり感じたことを、忙しい日々で忘れてしまふその一瞬を、十七文字に込めてみました。

夕暮れの木々の間の冬日向

穏やかな冬の日。気温は低いけれど、柔らかい日が差すスキー場。夕方、人も少なくなった広いゲレンデを滑り降りていた。白い雪がキラキラと綺麗で、こういう日は自然の中にいられることの有難さをつくづく感じる。途中のコースの分かれ道、木々の間から見える夕日と、そこからこぼれる日差しがとても美しく、思わず立ち止まる。太陽の傾きも空気も自分の気持ちも、その日その時で変わる。だからこの一瞬は二度とない時。そんなことを考えながら、この冬の景色を楽しんだ。

柚原誓子(ゆはらせいこ)

平日は会社員。休日は心惹かれるままに、趣味のスキー、温泉旅行を楽しんでいます。数年前から始めた俳句。あらためて日本語の美しさに触れています。

帰り道気持ちも急ぐ暮早し

秋から冬にかけて、日が短くなると一日が早くなるような気がする。日が長い夏の間であれば、まだまだ活動できると、その日一日めいっぱい満喫するのだけど、冬になるとなぜだか、早く帰らなきゃという気持ちになる。薄暗くなりかけた頃、どうしてもその日に足したい用事があり、急いでいた。まだ夕方五時前なのに、早く着かなきゃと気持ちがあせる。でも人間は本来、日が昇ったら活動し、日が沈んだら休むもの。現代人にもまだ、太陽とともに生きる感覚が残っているのだろうか。だから暗くなる。と気持ちが急いでしまうのかな。



事務局だより



北海学園大学法学部法律学科2年の和久井和佳奈です。2019年の9月頃からさっぽろ自由学校「遊」さんでNPOインターンシップ生として活動しています。私かなゼインターンシップ活動をやってみようと思ったかというところ、私は昼間はアルバイトをし、夜間に大学の授業という生活を送っているなかで、ただアルバイトしか経験せずに大学生活を終えてしまつのはもったいない。何か新たなことに挑戦したい、経験したい、という思いから活動を始めました。

「遊」での活動を通して私を感じたことは、皆さんが問題意識をしっかりと持っていること。そして、その問題についての発信力です。大学では発言するという機会が少ないですし、発言を求められても正解を言わなければならぬ、間違つたら恥ずかしいという気持ちが強く、発言するのをためらつてしまいます。私もそういう気持ちが強かったです。

しかし、「遊」ではむしろこういった問題があるから、みんな聞いて！知って！という思いがひしひしと伝わってきます。「遊」でお会いした皆さんからそういったパワーみたいなものを感じることができました。また、様々な講座を通して、学生間では難しかった何かについて議論をし、考えを深めるといったことを「遊」で経験することができました。

インターン生として、若者に興味・関心を少しでも持つてもらえるよう、残りの期間「遊」で活動していきたいです。

(和久井 和佳奈)

伊藤詩織さん 勝訴!

前号の特集「#Me Too」でお伝えした伊藤詩織さんの民事訴訟は、東京地裁で12月18日に判決があり、山口記者の不法行為を認め、慰謝料など330万円の支払いを命じました。勝訴をお伝えできて、本当にうれしいです。(細谷)



編集後記

「遊」の設立時からのメンバーで、札幌の市民活動を牽引してきた一人でもある東龍夫さんが亡くなってしまった。廃品回収の仕事に携わりながら、分かりやすく地球環境問題を語り「ゴミ博士」とも呼ばれていた東さん。「遊」の記念すべき第一回目の講座も東さんの講座だった。教室から受講者を外に連れ出して、近くのごみ収集所でゴミ分別について学んだことは、今でも記憶に残っている。(こ)

内科・神経内科
**札幌中央
 ファミリークリニック**
 外来一般診療
 月火木金9:00~11:30
 札幌市中央区南1条西11丁目
 ワンズ南一条ビル6F
 TEL. 272-3455

自然食ホロ

 札幌市東区中沼西
 5条2丁目3-16
 TEL: 887-6224
 いつも喜んで、
 感謝して。
<http://holo.sunnyday.jp/>



さっぽろ自由学校「遊」からのお知らせ

1月～2月の単発参加可能な講座より
(特に記載のないものは愛生館ビル5F 501会議室にて)

札幌市がフェアトレードタウンになりました！ 於：愛生館サロン（愛生館ビル6F・南側奥）

- ④ 1/9（木）18:45～ 札幌市のフェアトレードタウン認定への歩み ●萱野智篤（北海学園大学教授）
- ⑤ 2/13（木）18:45～ 企業としてのフェアトレードの取り組み ●パタゴニアアウトレット札幌南

日米安保体制を考える —「60年安保闘争」から60年 ●講師 北村公一（元小学校教員）

- ③ 1/14（火）18:30～ 1960年の闘いとそれ以降の状況
- ④ 2/4（火）18:30～ 2015年「平和安全保障法」から現在の安全保障を再度考える

私からはじめる社会変革 —アドボカシーのいろはを学ぼう

- ③ 1/15（水）18:45～ メディア、世論を動かす ●往住嘉文（元北海道新聞記者）
- ④ 2/7（水）18:45～ 議員、議会を動かす ●広田まゆみ（北海道議会議員）ほか

人も動物も満たされて生きる —アニマルウェルフェアをめぐる

- ④ 1/18（土）13:30～ アニマルウェルフェアから見る放牧酪農の可能性 ●須藤准一
- ⑤ 2/29（土）18:45～ 消費者にとってのアニマルウェルフェア ●山崎栄子・小池香織（生活クラブ生協）

このままでいいの？ 再生可能エネルギーの進め方 パート5

- ④ 1/21（火）18:45～ 小樽市最上の住宅地に突然浮上した太陽光発電計画 ●佐々木邦夫
- ⑤ 2/18（火）18:45～ 次々と北海道に計画・建設される巨大風車群 ●佐々木邦夫

アイヌが描く、アイヌモシリの未来 —政府によるアイヌ政策を乗り越えて part2

- ④ 1/24（金）18:45～ アイヌがアイヌとして生きていくために ●北原次郎太
- ⑤ 2/21（金）18:45～ アイヌを受け継ぐ一人として ●鹿田川見

多様性とバイタリティの国、インドを知ろう ●講師 ラトール旅子（北海道大学非常勤講師）

- ③ 1/28（火）18:45～ インドの政治、経済 ④ 2/25（火）18:45～ インドの教育、社会問題

ひきこもり問題を考える —市民としてできること <新規開講！>

- ① 1/29（水）18:45～ 当事者としてひきこもりの支援にかかわって… ●大橋伸和
- ② 2/26（水）18:45～ 中高年のひきこもりの実態と支援 ●田中敦

ゆうひろば

発行：NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」

〒060-0061 札幌市中央区南1条西5丁目 愛生館ビル5F 501

・郵便振替口座：02780-5-47036（名義：自由学校「遊」）



- ・TEL:011-252-6752
- ・FAX:011-252-6751
- ・syu@sapporoyu.org
- ・http://www.sapporoyu.org



オーガニック・自然食品専門店



おべんとうとおそうざい



札幌市中央区大通西23丁目
Tel 614-2406 Fax 614-3836
http://rarubatake.com
10時～19時(日～17時・祝～18時)